

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1272500511		
法人名	特定非営利活動法人さわやか福祉の会流山ユー・アイネット		
事業所名	グループホーム「わたしの家」		
所在地	千葉県流山市西深井 176-1		
自己評価作成日	平成22年2月10日	評価結果市町村受理日	平成22年5月30日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>・ケアの基本として、安心・尊厳・信頼を目標としている。また、職員の子供が身近にいることにより、様々な世代が一緒に過し、昔の大家族のような環境がある。家族との関係として、3ヶ月に一度の家族会で、出来るだけ家族の意見を取り入れるようにし、家族とのコミュニケーションを大切にしている。</p>
--

事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://kaigo.chibakenshakyō.com/kaigosip/Top.do">http://kaigo.chibakenshakyō.com/kaigosip/Top.do</a>
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>江戸川に程近い高台に建つホームは、地域初のグループホームとして開設した。家族が頻繁に訪問し、植栽ボランティアも引き受けたりしている。また、小さな子供もいる大家族的運営、医療連携の確かさなどが支持され、今も入居希望の見学が絶えない。法人は市行政からの信頼も厚く、高齢者生活支援、子育て支援活動などを市と協力して取り組んでいる。これらの活動が目目され、マスコミの取材を受けることもある。今後は、改めて入居者本位というサービスの本質に全職員が立ち返り、マニュアル整備などにも努めたいとしている。</p>
---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 VAIC コミュニティケア研究所
所在地	千葉県千葉市中央区千葉港4-4 千葉県労働者福祉センター5階
訪問調査日	平成22年3月11日

. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) 項目 1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します			
項目	取り組みの成果 該当するものに印	項目	取り組みの成果 該当するものに印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	66	職員は、生き生きと働いている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)		

自己評価(桂棟) および外部評価結果(全体)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>理念に基づく運営</b>					
1	(1)	理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所理念は「安心・尊厳・信頼」の三項目をいつも念頭におき実践できるように心がけている。	覚えやすい『安心・尊厳・信頼』を理念としてうたっている。職員は、研修で各自がそれぞれ理念の意味を考えて発表すること等を通して共有し、実践につなげるようにしている。	
2	(2)	事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自身が地域の一員として日常的に交流している	地域で行われる、子供会・食事会・生き生き体操等に参加、ホームで行う夕涼み会への地域の方々の招待にての交流を図っている。	自治会の会合には管理者自ら出席し、地域との交流に努めている。ごみゼロ運動やいきいき体操などに職員、入居者も参加しているほか、ホームでの各種催しに地域の人びとを招待している。小中校児童・生徒の福祉職場体験も受け入れている。	
3		事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	包括支援センターの行う地域の方々に向けた認知症を抱える家族の会に参加している。		
4	(3)	運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	自己評価、外部評価結果を公表し、話し合いの中から意見を頂き、サービスに活かしている。	運営推進会議は自治会代表や社協、地域包括支援センターの関係者、民生委員、ホームの入居者代表などで構成されている。昨年は3回開かれ、経営状況をはじめ自治会や包括支援センターとの連携状況、防災活動などが報告されている。	会議は構成メンバーも揃い、開催も定期的に行われているが、討議や意見交換がもうひとつ、との反省がある。議題の設定や議論の進め方などにホームが積極的にかかわることで、意義のある会議になることが期待される。
5	(4)	市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	流山の8事業所と市町村との会合を3カ月に1度持ちサービス向上に活かしている。	市のシルバーサービス活動の一環としてグループホーム連絡会を立ち上げた。運営推進会議のあり方、困難事例、運営方法など共通のテーマで情報交換している。また法人の代表は市の人権擁護委員として福祉全般に協力している。	
6	(5)	身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	いっさいの拘束を禁じ開設以来身体拘束を行っていない。職員にも具体的な行為を周知徹底している。	身体拘束のないケアに徹している。外部の研修に積極的に参加し、研修内容をケース会議等で報告することで拘束禁止の方針を職員全員が共有している。	
7		虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	利用者の居室、事業所内では絶対に虐待の無いように最善の注意を払っている。		

グループホーム「わたしの家」 自己評価(桂棟)・評価結果(全体)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護に関しての研修を司法書士の先生の研修にて家族・職員にも話し合い活用できるように支援している。		
9		契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	十分な話し合いと説明を行っている。		
10	(6)	運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族会をもうけ、直接、および間接的に意見や要望を受け入れている。	開設のときから家族会を発足させ、ほとんどの家族が参加している。家族会で出された要望はケアプランや事業運営に反映させ、また職員からサービスについての意見や提案を伝えるようにもしている。	
11	(7)	運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	会議やミーティング等において職員の意見や提案を聞き反映している。	職員の意見は申し送りノートなどで、普段から幹部職員も把握している。2、3ヶ月に1度開くケア会議にはほとんど全員が出席し、夜8時ころから深夜まで議論を交わすことも多く、そこでの意見はホームの運営や活動に生かされている。	
12		就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	出来るだけ努力して水準に沿うよう努めているが必ずしも職員の要望と合致しないのではないか。		
13		職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	出来るだけ研修を行ったり、外部研修に「行く機会を設ける等している。		
14		同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	流山市又は千葉県内のグループホーム連絡会でのネットワークに参加、研修会や相互訪問を行っている。		

グループホーム「わたしの家」 自己評価(桂棟)・評価結果(全体)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に事前にケース会議を開いて情報を共有している。入居後1週間は24H気持シートを使用し集中ケアを行っている。		
16		初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前に家族から以前の生活から家族の入居に至る前の主訴をできるだけ聞き出すようにしている。また、入居直後はできるだけ家族に生活状況の報告をこまめに行っている。		
17		初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	基本的な介護については確実にできるようにしているが、認知症特有の環境変化による混乱に敏感に対応できるように入居直後は重点的に本人の行動や表情を観察しケアを行っている。		
18		本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者の状態に応じてだが、基本的に一緒にゆったり過ごすようには努めている。		
19		本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会時など本人にとって、何が望ましいのかを良く話している。また、ケアにも参加してもらえるように本人に対するケアを職員と家族で共有し同じ対応ができるように心がけている。		
20	(8)	馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	なじみの人に関しては、情報として共有して本人との会話の中に随時取り入れるようにしている。しかし関係の継続に関しては家族に依頼をしているので促す程度である。	入居前のアセスメントで、なじみの場所、行きたい場所、会いたい人、頼りにしている人などを把握している。本人が希望する懐かしい場所、気になっている墓参りなどには、家族に協力を得て実現できるよう支援している。	
21		利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	個々人の相性等を見極めて利用者同士の関係は把握できているが、利用者のコミュニケーション能力が低かったり、好まない人が多く、もう少し何かの工夫が必要と感じている。		

グループホーム「わたしの家」 自己評価(桂棟)・評価結果(全体)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所の仕方や、利用者や家族関係の状況に応じて。実際には退所後の連絡を取る人は一部である。		
<b>その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	こちらから強制することはせずにできる限り本人のペースに合わせて、時には一緒に過ごしたり、また、職員が利用者本人の表情をよく観察するように努めている。	思いや意向を表出できない入居者の気持ちを察するには、こちらの声かけにどう反応してくれるか、表情の変化、とくに目の輝きを見落とさないように、と職員は共通に認識している。	
24		これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ケアをしていく中で、その人自身がどのような人生を送り、生活を送ってきたのか、また、人生の中でも、どの時代に重点を置いているのかの見極めを重点的に把握するようにしている。		
25		暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	認知症は精神状態の日内変動が激しいので、個々のその日の精神状況をしっかりと見極めながら、出来る事や出来ない事への支援を随時行っている。		
26	(10)	チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人のケアの在り方に関しては、本人の状態を勘案しながら、職員、家族、看護師、D、歯科医等に必要に応じて意見をもらっている。モニタリングも月に1回行って記載している。	ケアマネジャーが本人や家族の意向を聞き、現場職員の意見も入れて、希望に沿ったケアプランを作成している。プランは毎月モニタリングし、状況に変化が生じたときなどには現場の介護職員や医師、看護師の意見も参考にして随時見直しをしている。	
27		個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録には、職員間で把握したほうが良いと思われる本人の行動や言葉と職員の返答した言葉を意識して記入している。		
28		一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	訪問歯科やボランティア等の活用はあるが、事業所の多機能化はあまり出来ていない。		

グループホーム「わたしの家」 自己評価(桂棟)・評価結果(全体)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の老人会の催しや子供会、小学校の行事招待等には参加して、生活を穏やかに、かつ楽しめるように支援しているが、もう少し楽しめる資源があるのでは、と模索中。		
30	(11)	かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	家族了解のもと協力医に受診している。受診の際も必ず家族に相談してから行っている。また神経内科等は個人に応じて他医療機関等を利用している場合もある。	多くの入居者はホーム協力医の総合病院で健康管理してもらっている。協力歯科医も週1回、口腔ケアに来ている。必用に応じて、これまでのかかりつけ医受診を支援している。	
31		看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	2回/月訪問看護が来るので、些細なことでも相談できるようにしている。また様々な事に対してすぐに対応してくれている。		
32		入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	情報は入院時には認知症の周辺症状に重点を置きながら、サマリーを提供しているが、病院サイドからの情報は病院が個人情報の問題もあり、直接家族に対してのみ行っているため、時には訪問看護からの情報をいただくようにしている。		
33	(12)	重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	変化があるごとに、家族に対しては話し合いをするようにしているが、家族自身も元気なうちに話をしても実感がわかないようである。また、当GHがどこまで対応できるのかをよく話をするようにしている。	協力医の総合病院は医療・訪問看護とも24時間体制を整え、利用者の重篤化にも対応している。しかし最期をホームで迎えるためには家族の昼夜を問わぬ支援が不可欠であり、十分な話し合いと信頼関係のもとに看取り介護は実現する、との指針を設けている。	
34		急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	現在はなかなか訓練は定期的には行っていない。何かあったときに踏まえ定期的に職員間で随時確認するようにはしている。また、対応に困った時の為に、マニュアル本があり、時には訪問看護に対応の相談もしている。		
35	(13)	災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災に対する避難訓練は昼夜の設定で年に2回行っており、その都度職員間で振り返りを行い再確認をしている。地震や水害に関しては現在行っていない。	火災を想定した訓練は年2回行ない、避難・誘導の確認を重ねている。必要な防災設備も整えているが、グループホーム等の火災が相次いでいる折、できるだけ早い時期のスプリンクラー設置を考えている。	夜間や様々な災害を想定した危機管理、とくに地域住民の救援が得られる防災ネットワークづくりを期待したい。

グループホーム「わたしの家」 自己評価(桂棟)・評価結果(全体)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	日々気をつけるように努めている。	どんな言葉や態度がその人の誇りを傷つけるのか、一人ひとりの入居者について把握に努め、配慮している。	
37		利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員ができるだけ利用者自身が決定できるような声掛け等の工夫を心がけているが、開かれた決定はなかなか出来ないのので、ある程度限定した中での決定の方が多い。		
38		日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	その人のペースは大切にしてケアを行っている為、声掛けをして気分がのらないときは、強制はしないようにしている。		
39		身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	服装など自分で洋服を選べない利用者に関しては、その人らしい洋服を2着ほど提示してどちらかを選んだりしてもらっている。また、月1回のメイクボランティアがある。		
40	(15)	食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	準備等も、その日の精神状況に応じて行っている。後片付けなど自分の食器は自分で洗う習慣はあり、出来る人は自主的に行っている。	栄養士の職員がつくる週間メニューに沿って委託業者から食材が届けられ、当番職員が入居者の手も借りながら食事をつくっている。桃の節句や七夕の日には2ユニット合同で食事会をし、入居者の希望に応じて外食にも時々出かけている。	
41		栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	管理栄養士のもと食事のメニューがあり、それらを基本にして個人の病気や体を考慮しながらそれぞれ個別対応している。		
42		口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後声掛けし、口腔ケアを促している。		

グループホーム「わたしの家」 自己評価(桂棟)・評価結果(全体)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	トイレでの排尿ができるように日中は個別の排尿パターン(24H排泄チェック表)で個人に応じて誘導している。全員の排泄パターンは全利用者把握されている。	日々の排泄チェック表をもとに一人ひとりの排泄パターンが把握されており、こまめなトイレ誘導による排泄の自立支援が行なわれている。	
44		便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘に関して食事や、飲み物の工夫はしているが、運動に対しての働き掛けは散歩等で出来る人に対しては行っている。		
45	(17)	入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	利用者の希望に沿った時間帯に入れるように配慮している。入浴拒否傾向の方に対しては、タイミングを見計らいながら行っている。無理やりの入浴はしない。ただし、人に応じて家族協力時は曜日や時間が決まっている。	週2回の入浴を基本に支援しているが、「毎日入りたい」という風呂好きの入居者もあり、気分や体調に応じて、入居者の希望に沿うようにしている。	
46		安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	安心して入眠できるように、特に就寝介助を要する方に対してはお布団を一緒に敷いたりしながら安心して寝られる声掛けを行っている。		
47		服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の変更があった場合は、職員間で申し送りノート等で周知し、状況の変化を観察するようにしている。薬の目的等に関しては職員全員が理解しきれていない。		
48		役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	役割に関しては、個人の生活歴を重視しながら行っているため、役割の横行はない。楽しみ事については時々外食したり、週に一度の書道教室を楽しみにしている人が多い。		
49	(18)	日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	希望がある場合には極力行ける様に支援している。また普段行けない場所に関しては、本人の希望が無い場合が多く、自宅等に帰りたい方々はお正月等を利用して家族に協力してもらい規制して頂いている。また、家族旅行に定期的に行かれる方もいる	近くに竹林もある里山のような環境なので、散歩コースにはこと欠かない。週2、3回は周辺を歩いている。この他、外食に出かけたり、家族の協力を得て外出支援をしている。	



グループホーム「わたしの家」 自己評価(桂棟)・評価結果(全体)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金の所持に関しては、当然所持したい方々は持ってもらっている。その際の金銭管理は家族にも了解のもと、本人に行ってもらっている。		
51		電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人からの電話の希望があったり、また贈り物があった場合のお礼の電話や手紙等は支援している。		
52	(19)	居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	環境による混乱の無いように配慮している。(職員間でどのようなことで混乱するのか話し合うことが多い)	全体的に普通の家庭のような落ち着きを感じさせ、入居者の安らぎにつながっている。日中、母親と一緒にホームで過ごす職員の子どももいて、入居者の喜びにもなっている。	
53		共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビング内に何箇所かソファや椅子を設置している。		
54	(20)	居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室の空間作りは入所時に出来るだけなじみのあるものを置いてもらうようにしている。また、入所後も家族に提案したりしながら追加をしたりしている。ただし人によってはなじみのあるもので混乱する場合もあるので家族に応じている。	自宅にいた時と変わらぬ部屋作りを心がけ、居室はベッドや布団、カーテン、椅子など入居者が家で使い慣れたものを好きに置いて、居心地良く過ごせるようにしている。	
55		一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	特に物を排除していくことはしていない。必要に応じて増やしている。		